



[講演]

本学が迎える正規学部 留学生受け入れの新時代

国際化推進機構長、異文化コミュニケーション学部教授
池田 伸子 氏

○池田 ご紹介にあずかりました立教大学で国際課担当の副総長しております池田です。国際化推進機構というのが立教大学の中にはありまして、本学の国際化について、一応、大学全体を率いて引っ張っていくというようなお役目をいただいております。同時に、私は日本語教育センターのセンター員でもございますので、大学の国際化を考えるという立場と、それから、これまで日本語教育に長年携わってきたという、その2つの視点を交えまして、立教大学が迎える、これからの正規学部留学生の受け入れについて皆さんと共有をしながら、同じような課題を抱えていらっしゃるここにご参加くださっている方々もいらっしゃるのではないかと思いますので、そこを共有しながら、今後、きょうの後半部分につながるようなお話ができればと思っております。

きょうのテーマですけれども、本学が迎える正規学部留学生受け入れの新時代ということで、先ほど趣旨説明にもありましたように、そういうふうに大学が動いていくことで、大学を変えるのか、大学は変わるのかということもちょっと頭の片隅に置きながらお話をしていきたいと思えます。**【スライド②-1】**

まず、立教大学がきょうのシンポジウムでこの正規学部留学生の受け入れをテーマに設定した背景について少し共有させていただきたいと思えます。そこは先ほど趣旨説明でございましたように、立教大学は大学全体で国際化、グローバル化に取り組んでいる最中でございます。そこには「Rikkyo Global 24」というものがありまして、大学としてどういうところを目指していくのかというのをホームページ上に公開しているところです。その項目の1つに留学生の数を増やしていくということがございます。先ほどあったように、その設定をした当

時は500名だったところを、2024年には2,000にしていくという目標が掲げられています。

今現在ですけれども、だいたい立教大学には980人弱の留学生が来てくれています。その内訳は、立教大学の留学生ということで正規学部学生、正規大学院生、それから立教大学では特別外国人学生というふうに呼んでいますけれども、協定に基づく半期、それから1年間の短期の留学生。それから、数週間程度の超短期の留学生という4つの種類があるんですけれども、その4つを合わせて現在980人弱のところまで来ているというのが今の立教大学の現状です。

スタート時には500名だったということを考えますと、2018年度、19年になっただけですので、2018年の段階で倍のところまでは来ている。ただし、そこからさらにまた倍というのが2024という数字を目指して、これから動いていかなければいけないということになります。

その4つの種類の留学生数をどうしていこうかというのは、先ほどの趣旨説明の中でも少し出しましたが、正規の大学院生、それから協定に基づく留学生、それから超短期の留学生においては、だいたい当初設定した目標の達成が見込まれています。これまでのように取り組みを進めていけば、当初設定した目標値はおそらくクリアできるだろうということが見えています。

ただし、問題は、ここです。正規の学部留学生。このところを1,000名にするというふうに、立教大学は数値目標を、一応、目標ですけれども置いていますが、今現在444名というのが立教大学の正規の学部の留学生数になっています。ですから、ここを1,000ということになると、「倍」と書いてありますけれども、2.5倍ぐらいの勢いで頑張っていかないと1,000というような目標値にはとうてい届かないということになります。

それに加えて、正規学部学生は、学位の取得を目的として大学で学ぶ学生ですから、例えば、半期それから1年間留学をして自分のもとの国の大学に帰るという学生とはちょっと事情が違ってきます。立教大学が大学として責任を持ってその学生たちを4年間育て、さらに望む学生には進学を、それから、望む学生にはきちんとした就職をというところまできちんと考えて受け入れるという責任があります。

ですから、この正規学部学生の数を増やしていくということに大学が積極的に

取り組んでいくということは、そもそも大学にそういう覚悟があるのかということとを大学全体できちんと共有し、そこが共有できて進めていかなければならないことだと思っています。ですので、きょうこのテーマを日本語教育センターとして設定し、きょうのこの機会はまだ本当に1回目、初めてですけれども、ここから少しずつでも立教大学の内部の人たちにその思い、それからその覚悟というのを共有していくということを始めの必要があると思っています。ですので、きょうはそういう覚悟が必要な正規学部学生の受け入れということと、立教大学としてどう考えていくかということについてお話ができればと思っています。【スライド②-2】

なぜ正規学部留学生なのか。それほどの覚悟が必要で、短期留学生とは違ってしっかりと立教大学として責任を持って教育を行っていくということが必要な正規学部学生。なぜそこを増やすのか。例えば、短期留学の学生をもっと増やせばいいではないかというような考え方が一方であろうかと思います。つまり、立教大学が掲げているのは、2024年に留学生2,000名という数値ですので、その内訳については、まだ再考の余地はあるからです。

でも、なぜ立教大学は今、正規学部学生を増やそう、増やさなければいけないのかということについてお話を進めていきたいと思います。その前提は、まずは18歳人口の減少。これは立教大学だけが直面している課題ではなくて、日本の大学全体がこれから直面していく課題だと思っています。このグラフちょっと小さいんですけど、ホームページでググっていただきますと、18歳人口予測というキーワードでたくさんのグラフが出てまいります。その中の1つですけども、もう本当に2020年、2030年というふうに進んでいくと、今の90%を割り込んでくる。80%台に18歳人口が突入してくるというようなことがもう見えているということです。

そうすると、この18歳人口の中の全てが大学に進学するわけではありませんから、大学に進学してくる学生の数も日本国内を見ている限り、どんどん、どんどん少なくなってくるという現象があります。

その中で、大学が、例えば定員を減らすというようなことをしなければ、大学に入学してくる日本人の学生のレベル、それから質というのをどういうふうにも高いままでコントロールしていくのかという課題に、おそらく日本の大学はこれから取り組んでいかなければいけないんだろうと思います。



それからもう1つが、グローバル化ということです。日本の大学、さまざまところ、社会だったり、それから文科省だったり、グローバル化をなさいという圧力を受けていますそして、すでに日本全体がグローバル化の波に飲み込まれているという状態があります。例えばです

けれども、2018年1月1日現在、在留している、日本にいる外国人は249万7,000人で、前年度比で17万4,000人増えています。これを20年前と比較してみると、100万人増えています。日本に在留している外国人の数です。ちょっと視点を変えてみて、大学というのはこれから日本の社会をつくっていく学生を育てていく、人材を育てていく組織ですので、20歳代はどうなのかというところで見ると、74万8,000人の外国の方が日本にいます。これは、同世代の日本人の5.8%です。何となく5.8%というと、大したことないんじゃないかというふうに思われてしまうかもしれませんが、言い方を変えてみると、17人に1人です。17人に1人がもう既に20歳代、外国人になっています。さらに、東京、立教大学は東京にありますので、東京というところで見ると、20歳代の10人に1人が外国人です。この人口動態調査で見ると、もう既に数値からも、東京に限ると20歳代、若い人の10人に1人が外国人になっているという状況が見えてきます。

さらに、働いている、じゃあ大学を卒業した学生たちが今度は日本の社会の中で働いていくことになるわけですが、彼らが働く環境はどうかということですが、17年の12月末現在の日本の就労者数は6,531万人です。17年の10月末現在の外国人就労者数は127万人です。これを計算してみますと、だいたい2%という数字。でも、この2%も、言い方を変えると、50人に1人が外国人ということになります。50人に1人と言うと、例えば、このぐらいの教室の中で考えてみると、数人のもう外国の方が日本という国で働いているということになります。こういう社会にこれから生きていく学生を日本の大学は育てるということになります。

つまり、私も含めて、私たちが大学生だったときの大学の教育と、これから日

本の社会をつくっていく、学生を育てる、人材を育てる大学の教育を重ねて考えるということは、もう無理なんじゃないかということです。つまり、数十年前の大学の人材教育は、やっぱり日本という国の中で、おそらく大多数は日本の人たちとともに働いていく。海外に出ていったりすることはあるでしょうけれども、やはり日本人と共に働くということが基本になった人材キャリア教育だったのだらうと思います。でも、今の状況、これから大学を卒業し、日本あるいは地球で働いていく学生たちを育てるときに、やはり私たちが見ていた景色をそのまま思い描いて教育をしていくというのは、やっぱりちょっとそこに格差が出ているというか、乖離が生じているのではないかと思います。これからの学生が見る景色というのは、私たちが想像できるものとは変わってくるというところにきちんと着眼をして、大学教育というのを考えていく必要があるのではないかと思います。【スライド②-3】

こうなってくると、先ほど立教大学は数値で2,000人という目標を掲げました。正規留学生は目標値1,000人です。だから、正規学部留学生を増やさなければいけませんというところは置いておいたとしても、日本の大学、日本をこれから引っ張っていく、日本社会で生きていく、そういう人材を育てるという責任を持っている日本の大学として、これから学生を育てていくという視点から考えても、正規の学部留学生を増やすということには意義があるのではないかなと思えてくるのではないのでしょうか。

もう少し具体的に言いますと、見えてくる景色が違う。つまり、これから生きていく学生がどういう社会で生きていかなければいけないのかということを考えると、よく「VUCA（ブーカ）」というふうにビジネスの世界なんかでは呼ばれたりしていますけれども、変動性、不確実性、それから複雑性、曖昧性、こういうものがどんどん、どんどんこれからの社会は強くなっていく。そういう社会の中で生きていかなければいけない。つまり、ちゃんと生きていける学生を育てることが大学としての責任になってきます。つまり、正解のない課題にどう取り組んでいくのかとか、前例がないときにどうやって一歩ずつ進めていくのかとか、あるいは、先が見えないけれども進まないといけないときに、ちゃんと進めるかというようなところ。そういう力を大学としてつけていく必要があるのではないかなと思っています。

そういうふうに考えると、大学で育成すべき人材像としては、ここに掲げさせ

ていただいたような、曖昧で先が見えない状況でも、みずから考え、他者と協働できるとか、失敗を恐れず経験から学べる、与えられた環境の中でベストの解を提案できる、必要なときに必要なことを学び直すことができる。それから、異文化に対する認識を持ち、それを受容できる人材。いろいろなことがいろいろな方面で言われていて、それが社会人基礎力という名前であったり、それから21世紀型スキルであったり、さまざまな呼び方をされていますけれども、これまで大学でこれを与えればいだろうと思って考えられてきたハードスキル、つまり知識の部分だけではなくて、むしろそれ以外の部分、ジェネリックスキル、汎用型能力とか、あるいは、ソフトスキルという名前で今呼ばれていたりしますけれども、そういう部分がこれからの学生、これからの社会で生きていく人材にとっては求められていくのではないかと考えています。【スライド②-4】

そういう教育を行うことを期待されている大学だからこそ、正規学部留学生だと私たちは考えています。つまり、正規学部学生は4年間、留年しない限りですけれども、4年間みんなと一緒に学びます。短期留学生は半期で帰ります、1年間で帰ります。でも、自分の経験を思い返してみても、4年間、同じ学部で、同じ学科で学ぶ。その友達の中に違う文化、違う背景を持ったいろいろな学生がいるという環境は、日本人の学生にとっても、

それから、立教大学で学んでくれている正規の学部の留学生にとっても、お互いにとてもいいことだと思います。また、授業だけではなくて、さまざまな授業外の活動、そこにもいろいろな学生がいる。そういう中で4年間成長していくという環境を、それが普通にあるという状況にできれば、そこで学生はチームビルディングを学ぶ。例えば、日本人同士でもチームビルディングを学ぶことができます。でも、そこにいろいろな背景をもった学生が入っていることで、そのチームビルディングのスキルをどれだけ豊かなものにできるか。それから、批判的論理的思考やみずからの役割認識、こういうものも日本人同士でも十分学べます。でも、そこにいろいろな背景を持った学生がいることで、その学びの幅がどれだけ広がるか。また、地球市民教育、他者との協働、文化的差異の認識と受容。ここにもやはりいろいろな学生が4年間、同じ学部の学生として、同じ学科の学生として、あるいは3年生、4年生になったときに同じゼミの学生として、あるいは同じサークルの友達として、同じ部活の学生として、いろいろな環境でそういう多様な学生と交流をするということが本当に当たり前になるような環境

をつくるということがとても大事だと考えます。だから、正規学部学生というのは、立教大学にとって本当に重要なファクターにこれからなっていくんだと思います。

ソフトスキルという言葉。ここは日本人学生にとっても外国人留学生にとっても、お互いに、それぞれが同じ場所にいることで、4年間学んでいくことで高めていくことができるのではないかと考えます。ソフトスキルについては、これはアメリカの定義ですけれども、コミュニケーション力、想像力、分析力、柔軟性、問題解決力、チームビルディング、傾聴力と、他者と触れ合う際に影響を与える一連の能力というふうに定義されていますけれども、もちろん日本人同士でもさまざまな活動を通してこういう力をつけていくことはできます。でも、彼らが卒業後に出ていく社会は、もはや日本人だけで構成される社会ではないんだということです。それを前提として、大学での学びの中に、彼らがこれから飛び込んでいくであろう風景。それが当たり前のものとしてある。そういう社会の中で生きていく力をつける。そのためにも、正規留学生、正規学部留学生というのは、大学にとってとても重要で必要な存在なんだと考えます。【スライド②-5】

そこで、増やせばいいじゃないかということになるんですけども、大学が正規学部の留学生を増やすためには、やっぱりさまざまな課題があります。まず、今の立教大学の正規学部留学生の受け入れですが、今の外国人入試は、異文化コミュニケーション学部は若干別のスタイルをとっていますけれども、ほかの学部は日本留学試験を利用しています。おそらく日本の大学の多くが利用していると思います。その大学、その日本留学試験を利用した入試を実施した結果、現在の立教大学の留学生は444人が学んでいます、その93%が中国、それから韓国からの学生になっています。ここには台湾、それから香港は含まれていません。ここに台湾、それから香港を加えると、もっとこの93%という数値が上がります。つまり、多様な、いろいろな背景を持った学生を受け入れるというところにおいては、今の立教大学が実施している入学試験は、うまく機能していないということになります。やはり、日本留学試験でかなりの高得点層でない、立教大学には入れないという状況が今ありますので、やはり中国や韓国以外の国から日本留学試験の高得点層に食い込むというのがかなり難しいという状況があります。なので、今の外国人入試を続けていく。その中で、正規の留学生を増やしていくというところについては限界が見えているし、多様性というところでも、な

かなかそこについて目標を達成していくというところが見えてこないということになります。

参考までですけれども、今の444人という数字は、パーセンテージにすると、だいたい立教大学の学部生の中の2. 数%が、今、留学生の割合ということになります。例えば、国際化が進んでいる大学と言って、なんとなく名前が浮かぶような大学、上智大学であるとか、国際基督教大学であるとか、そういうところは5%を超えています。学部学生の中の留学生の割合が5%越えです。若干別格のAPU、アジア太平洋は50%に近づこうかというような割合になっています。だから、そこはもう別格なので置いておいて、国際化が進んでいる、なんとなく留学生が多いなというふうにイメージしている大学は5%越えです。立教が目指している1,000という数字を達成できると、だいたい5%に近づきます。

だから、今の外国人入試のままで、その5%を達成しようと思うと、上智やICUは、この中国、韓国からの学生が93%という状況ではなくて、もっといろいろな国からの学生がその5%を構成している。やっぱりそこもやはり念頭に置く必要があるのではないかと考えています。

そうしたときに、やはり大学として考えなければいけないのは、新しい受け入れ。新しい形で外国人留学生を、正規学部学生を受け入れるという方向です。これまで国際化推進機構のほうでは、いろいろな地域の状況を調べたり、ニーズについても調べたりということをしてまいりましたが、その中でやはり9月入学というのはマストだろうと考えています。既に幾つかの学部は9月入学で正規の学部学生を受け入れ始めていますが、これをさらに広げていく必要があります。

ただし、多くの学部は4月からの学生を対象にさまざまなカリキュラムが組まれていますので、そこの学部になるべくご負担をかけないような形の9月入学というのをこれから提案していく必要があるのではないかと考えています。

また、渡日不要の選抜。日留試、日本留学試験も、厳密に言うと、来なくてもいいのですけれども、いわゆるそうではなくて、日本語力に偏らない形の新しいタイプの入学者選抜というのを提案していく必要があるのではないかと考えています。

これは、現在やっているような日本留学試験一律ということではなくて、国や地域、そこでどんな教育が行われているのかということをしきりと把握した上で、その地域地域に合った書類を求めていくというような形の入試。それを立教大学

として広めていくというか、導入をしていく必要があるのではないかと考えています。

ただし、これをするためには、まずは戦略的な海外広報が必要になってきます。きょうこれから登壇をしてくださる先生方、いろいろな国から来てくださっていますけれども、立教大学という大学を、まず、いろいろな地域で知ってもらう必要があります。立教大学というのがどういう大学で、どんなことが学べて、卒業したらどうなるのかということをしちんとその地域に届けるということを立教大学はこれからしていきたいと思っています。ただ海外の留学フェアに出て帰ってくるというような形ではなくて、明確にターゲットを絞った海外広報というのをこれから展開してまいります。そこで必ず、行ったからには、何かして帰ってくる。何かお土産を持って帰ってくるというような海外広報というのをこれから展開をしていく必要があると思います。

その上で新しい枠組みをつくり、受け入れていくということになりますが、やはり日本の大学ですので、入学後の集中の日本語教育、これはマストです。英語で卒業できるコースというのやはり一定数必要です。ターゲットにする地域によってはそれが求められてきます。でも、同時にやはり日本で学ぶということがどういうことかということを考えて、日本語の集中教育は絶対に必要だろうと思っています。ただし、同時に、低年次の英語科目というのは、学生に対する安心材料としても必要だろうと思っています。

さらに、卒業後まで大学として責任を持つという観点からも、立教ならではのキャリア教育というのは絶対に必要ですし、ここは海外の学生獲得でも十分アドバンテージになると思っています。つまり、大規模すぎない大学、それから学生と教員、学生と職員、教員と職員の距離が近い。コミュニケーションが十分とれていく大学というところで、その立教大学の強みを生かしたキャリア教育。しっかりと卒業させて終わりというのではなくて、その学生がちゃんと幸せになっていく教育、それから支援というのを、責任を持ってやっていける体制というのが必要だと思っています。つまり、入学後の教育だったり、それから学生支援というのは、大学として同時に責任を持ってきちんと行っていく必要があろうかと思っています。

これを実現していくためには、きょうコメンテーターとして来てくださっている各学部の協力であったり理解であったりというのは絶対に必要だし、やはり各

学部、大学全体が同じ目標を見て、なぜそこを目指すのかということをちゃんと共有した上で前に進むということは絶対に必要だと思っていますし、入学センターを初め、キャリアセンターを初め、職員の方々ともきちんと同じ目標を見て仕事を進めていくというのがマストだと思っています。それは非常に大変なことだというのはわかっていますけれども、やはりこれからの社会で生きていく学生を育てるという観点からも、ここはどれだけ大変であっても、一歩ずつでも前に進めなければいけないと考えています。

ですから、きょうこの機会をいただきまして、きょうここに集まってくださっている方々とどうすればいいんだろうとか、ここはどうするんだというような意見交換から始めさせていただいて、来年、再来年、1年ずつ、立教大学としてはその目標に向かって進んでいける、まず最初の一步にきょうがなればと思っています。**【スライド②-6】**

私からは、これでお話を終わらせていただきますが、正規学部の学生は増やしていくためには、やはり全学的な取り組みが必要だということです。やはり同じ目標を見て、それが必要だということを共有して、その上で、みんなで課題を解決しながら進んでいくということが求められているのではないかと思います。ご清聴ありがとうございました。**【スライド②-7】**

【スライド②-1】

多様な正規学部留学生受け入れが立教大学を変える？

本学が迎える正規学部留学生受け入れの新時代



立教大学
国際化推進機構長
池田 伸子

【スライド②-2】

立教が直面する課題

Rikkyo Global 24, TGU
2024には留学生数2000人 !!
現在 980人弱なので 倍

立教の留学生

- 正規学部学生 ← 受入増
- 正規大学院生
- 協定に基づく短期留学生
- 超短期留学生

【スライド②-3】

なぜ正規学部学生なのか

18歳人口予測(全体：全国：2018～2030年)

<http://souken.shingakunet.com/research/2018/11/182018-621f.html>

18歳人口減、グローバル化への圧力、

↓

見える景色が変わってきています

2018年1月1日現在 在留外国人 249万7千人 (+17万4千人)
 20歳代 74万8千人 (同世代の日本人の5.8%) 17人
 一人に一人
 東京では 20歳代の10人に一人が外国人

2017年12月末現在 日本の就労者数 6531万人
 2017年10月末現在 外国人就労者数 127万人
 およそ2% 50人に一人

【スライド②-4】

学生を取り巻く環境

少子高齢化、グローバル化、格差の拡大、IT技術の急進展等

VUCA Volatility (変動性), Uncertainty (不確実性), Complexity (複雑性), Ambiguity (曖昧性)

◆正解のない課題の解決 ◆前例を探せない ◆先が見えない

▼

大学で育成すべき人材像

曖昧で先が見えない状況でも自ら考え、他者と協働できる人材

失敗を恐れず、経験から学んでいける人材

与えられた環境の中でベストの「解」を提案できる人材

必要なときに必要なことを学び直すことができる人材

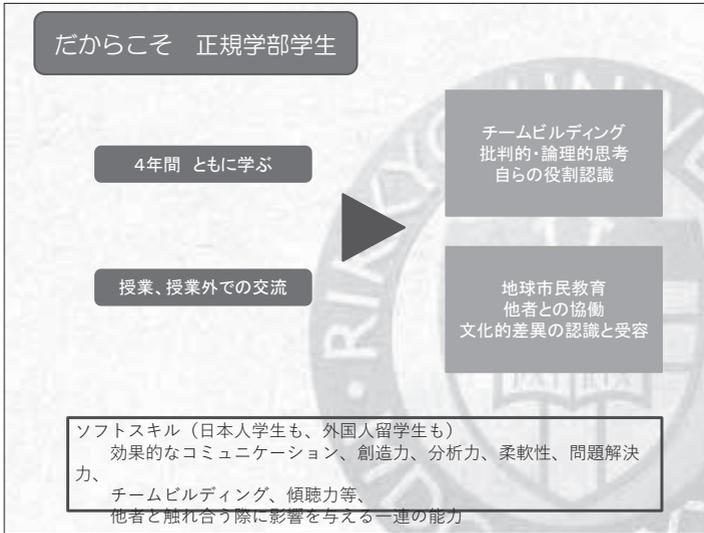
異文化に対する認識を持ち、それを受容できる人材 などなど

社会人基礎力

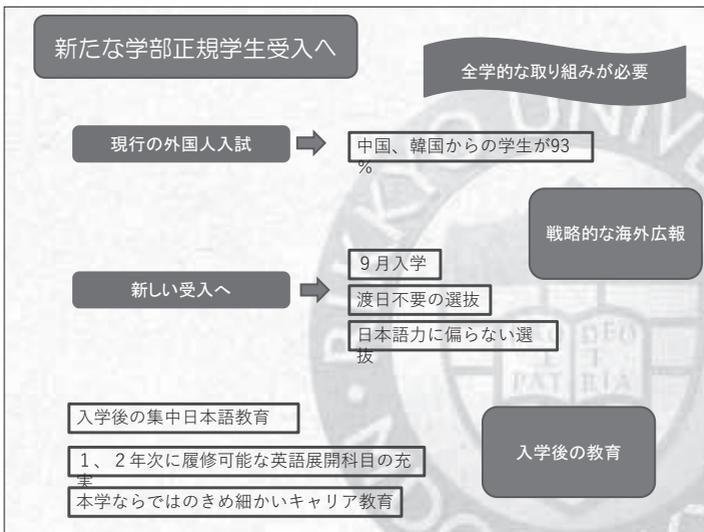
21世紀型スキル

汎用型能力
ハードスキル+ソフトスキル

【スライド②-5】



【スライド②-6】



【スライド②-7】

ご清聴ありがとうございました

